

書 評

手塚 章・呉羽正昭編：ヨーロッパ統合時代のアルザスとロレーヌ。二宮書店、2008年4月刊、182p., 3,000円（税別）

アメリカ発の金融・経済危機の情報が瞬時に世界中に広まり、国や地域を越えて株価暴落や経済不安を引き起こしている様は、世界経済の一体性や金融（マネー）を通じた各国経済の国境を越えた強い結びつきを実感させる。こうした結びつきは、見方を変えると経済活動を通じた国境を越えた地域間結合の一形態とも解釈でき、少なくともその可能性を連想させる。その一方、グルジアでの紛争をはじめとする地域紛争は、政治・経済・民族間対立を背景とした政治的空間の分離が今日的課題であることを認識させる。

地理学において地域や空間の結びつき（空間結合）や空間分離に関する理解は重要なテーマであり、これまでも論じられてきたが、その多くが国を基本とする政治・経済協力や、新興経済地域の形成といったテーマを扱うものであった。しかし、1990年代初頭の東西対立の終焉以降、世界的な（グローバルな）規模で社会経済構造が急速に転換し、国家や政治体制という枠組みを超えた地域間結合が現実世界において主要テーマとなる中で、国境を越えた地域間連携に関する研究や著書が地理学でも数多く見られるようになった。

本書は、ヨーロッパ連合（EU）の国境地域を対象として文化的・社会的・経済的な結びつきの進展を現地調査に基づいて明らかにしており、地域間結合の実態を具体的に理解することのできる好著といえる。とくに1980年代半ば以降の「国境なきヨーロッパ」への取り組み、またその結果としての地域変容の姿が主にドイツとフランスの国境

地域の事例調査に基づいて議論されている。執筆者は編者の手塚と呉羽をはじめ地理学分野において第一線で活躍する内外の8名であり、本書はこれらをメンバーとして2001年～2002年度と2005年～2007年度にかけて実施された文部科学省科学研究費による共同研究の成果を基にまとめられている。

主に扱われる地域はアルザスとロレーヌ両地方である。両地方は普仏戦争や第1次世界大戦時における領土争いの対象となった地であり、市村（2002）をはじめ歴史学や人類学的視点から各地方の地域性（独自性）の形成過程を扱った著書も多い。そうした著書や研究とは異なり、本書では紛争や国境という空間摩擦などの歴史的背景をふまえつつも、現在進行している両地方の空間的結合や分断を実例に則して明らかにすることが主眼とされている。

構成は、導入部として本書のテーマと対象地域の概観に触れる「序論」のほか、「第1部アルザス地方」と「第2部ロレーヌ地方」となっている。このうち第1部は「第1章アルザス－フランスの周辺からヨーロッパの中心に－」、「第2章多国籍企業の立地展開と地域経済」、「第3章アルザス地方の言語問題－地域言語の展開と現状－」、「第4章ストラスブール－国境都市からトランスボーダー都市へ－」、「第5章バーゼル都市圏と越境地域連携」からなる。第2部は「第6章ロレーヌ－重工業からヨーロッパ統合へ－」、「第7章ロレーヌ地域における産業転換過程」、「第8章グランドリジョン（Saar-Lor-Lux 国境地帯）における人口流動」、「終章統合ヨーロッパにおける国境地帯の将来と課題」という構成である。

まず、序論において編者の一人である手塚はア

ルザスとロレーヌにおいて地域間結合や地域連携を議論する意義を次のようにまとめている。本書で扱う両地域はフランス北東部に位置し、ベネルクス3国からドイツ・フランス・スイスの国境地域にまたがる「ヨーロッパ中軸国境地域」に含まれる。これら地域では政治的境界としての国境に加えて、言語をはじめとした文化的・社会的・経済的境界が複雑に交錯し、これらが障壁となり、経済的ポテンシャルが高いにもかかわらず、経済発展が不十分な状態である。このため現在進行中の地域統合の動きが今後の経済発展を占う上でも重要である、としている。

続く第1部では、アルザスでの調査に基づいて地域間結合の実態が明らかにされる。序論の議論を引き継ぐ形で、第1章でもアルザスの位置づけが検討されており、当地方がフランスという国家レベルでの最周辺部の位置から、EU統合やグローバル経済の進展によってヨーロッパ経済の中心部に隣接した中心性を備えた地域となった点が確認される。ただし、域内では経済格差が現に存在しており、こうした経済格差は新たに発生した中心性を活かした経済発展に基づいて解消されるべきであり、そのためには資源管理や交通計画などにおいて国境を越えた統一的な地域計画や制度の構築が求められるとされる。

それでは国境を越えた統一的な制度とは、具体的にどのような形態がありうるのか？第2章においては、地域経済動向と関連させながら外国籍企業の進出を分析することにより、アルザスにおける民間ベースでの地域間連携が概説されている。この中でアルザスでは外国籍企業の進出が活発である点が明らかにされており、こうした傾向はヨーロッパ中軸地帯に位置するという立地位置の優位性のほか、積極的な外資誘致政策とも関係していると指摘されている。第3章はアルザス語という地域言語の形成過程と利用実態の分析を通じ

て、言語という文化的側面から地域間交流の特徴が明らかにされている。著者によれば、フランス国内における少数地域言語の中でもアルザス語は相対的に保持されているとされる。その理由として言語的にドイツ語との親和性の高いことを背景として、人的な地域間交流が活性化の中で逆に言語の有用性が高まった点が指摘されている。

第4章では、ライン川沿いに位置するストラスブールに着目して、都市計画を中心とした法的・社会的制度における国境を越えた地域連携の具体例が示されている。1990年代にストラスブールでは、都市整備の核として「ストラスブール・ケール軸」構想が策定され、EUの補助金などを得て公園整備等の共同事業が推進されるなど、公的主体間での協力関係が強化されている。こうした中で、都市計画や地域計画といった従来は国や地域の社会的・法的枠組みで構築されていた制度が国境を越えた行政体との連携に配慮し、それらを通じて相互発展を主眼とした制度へと変質している現状が示されている。地域間連携に参画する主体が自治体間のみではないことは、第5章のスイスを含めたドイツ・フランスの3か国にまたがるバーゼル都市圏の事例から明らかにされている。国境を越えた地域連携(著者の表現では「越境地域連携」)の実態が連携主体に着目して議論されており、バーゼル都市圏での越境地域連携では、制度的に国や州・県・地域レベルにおいて重層的な組織が形成され、自治体のみならず企業や個人などが担い手となっているのである。

第2部ではロレーヌでの国境を越えた地域連携のあり方が示される。第6章ではロレーヌの全体像が大局的に議論されており、歴史的な地域変遷、工業や都市と農村の変化といった考察がなされる。この地域が産業構造の変化や交通環境変化に伴って、重工業地域という性格からヨーロッパ統合の中核地域へと変化しつつある点が強調され

ている。こうした言説と連動して、第7章ではロレーヌでの鉱工業の衰退と産業転換が論じられている。その中で、鉱工業衰退に伴って採用された産業転換政策ではロレーヌのヨーロッパ中軸地帯への近接性や、交通の要衝に位置する点が注目されており、こうした利点を活かす形で自動車や物流拠点の形成などが図られていることが事例を通じて明らかにされている。

こうした産業転換政策は必ずしも全ての地区で成功するわけではなく、労働力の一部は国外へ流出している。第8章は、ドイツ・フランス・ルクセンブルク・ベルギーにわたるグランドリジョン（ザール・ロル・ルクス国境地帯）に着目して、国境を越えた人口流動を通勤、買い物、観光の3側面から考察している。とくに通勤流動においては、ルクセンブルクは低い失業率や高賃金などを背景としてロレーヌなどから多数の労働者を通勤者として吸引していることが示されている。終章においては、これまでの議論に基づきながら EU を中心とした統合ヨーロッパにおいて国境地帯が抱える課題と将来像が簡潔にまとめられている。

以上のように、本書はアルザスとロレーヌという国境地帯を対象として、丹念な現地調査にもとづいて文化的・社会的・経済的な側面からみた地域間結合や地域連携の実態をまとめている好著といえる。現在ヨーロッパで進行している地域変化の実例を丁寧に調査し、数多くの図表を用いて具体的に議論を進めており、その資料的価値のみならず、学問的価値を率直に高く評価したい。とりわけ、複数の事例地域内において主要テーマが設定され、多様な側面から地域結合や地域連携の姿を理解できる点を評価する。

ただ、こうした多様な側面からの議論は両地域の共通性と差違を考察し、また、現在におけるヨーロッパの他の国境地帯と比較する上で、逆に読者の視点を拡散させてしまう危険性がある。願

わくは、アルザスとロレーヌ両地域を統一した項目で比較する箇所を設けて両者を比較することを通して、より明瞭に拡大 EU における国境地帯の変化や、国境を越えた地域連携のあり方を議論して欲しかった。「序章」と「終章」において全体を見渡した考察がなされているが、可能であれば共通の項目（人口などの社会属性や経済特性）を比較する部分があっても良かったのではないだろう。

いずれにせよ、本書を通じて EU 拡大の中で進展する国境を越えた活発な人的・物的・経済的交流や情報交換、また、行政や民間企業による地域連携の実態を広く理解することが可能である。EU やヨーロッパ各国をフィールドもしくは研究対象とする研究者はもちろんのこと、教育、行政に携わる方々にも是非ともお勧めしたい一冊である。

（伊藤徹哉）

文 献

市村卓彦 (2002) : 『アルザス文化史』人文書院。

中西僚太郎・関戸明子編 : 『近代日本の視覚的経験 絵地図と古写真の世界』ナカニシヤ出版、2008年11月刊、195p.、2,600円（税別）

「古地図は、大地に刻まれた人間の歴史の記録であるとともに、それぞれの時代の人間が、どのように世界をとらえてきたかという世界観ないしは世界認識の反映であるといえる」。織田武雄がその著書『地図の歴史』の冒頭で掲げた上記の言葉を借りるならば、本書は近代という時代、さらにはその時代に生きた人々の世界認識を鳥瞰図、民間地図、古写真を通して解明しようとした意欲作である。

P・D・A・ハーヴェートに依拠して地図の歴史を紐解くと、小地域の地誌の詳細を掲載した図(トポグラフィカル・マップ)の発展過程は、絵師による風景画から絵地図(ピクチャ・マップ)へ、さらに測量師による近代地図(カルトグラフィー)への移行と見ることができる(矢守1984)。既往の研究が絵地図と近代地図とを切り離して分析してきたことに対し、本書に一貫する独創的な視点の一つは、絵地図から近代地図への変遷を連続的視野から検討したことにある。例えば、本書が鳥瞰図に着目した意図は、それが絵と地図のどちらに属するかという問いが無意味であることを示すにとどまらず、むしろ近代移行期の諸相を解明するためには絵画と地図との中間に位置づけられる絵地図にこそ着目すべき重要な意味があると示唆することにあつたと思われる。「真景図」を日本画の伝統と西洋的視点を併せ持つ風景画の一潮流と位置づける本書の指摘に着目するならば(17p)、本書の問題意識は近代日本における日本の伝統と西洋の影響の関係を問う布石としても重要であろう。

本書の構成は以下の通りである。

- 第Ⅰ章 描かれた植民都市－近代札幌の「風景」
(山田志乃布)
- 第Ⅱ章 近代地方都市図の展開－富山・金沢の民間地図(山根 拓)
- 第Ⅲ章 熱海温泉地の鳥瞰図の特色と表現内容
(関戸明子)
- 第Ⅳ章 明治・大正期の松島を描いた鳥瞰図(中西僚太郎)
- 第Ⅴ章 明治四三年の群馬県主催連合共進会と前橋市真景図(関戸明子)
- 第Ⅵ章 昭和初年の千葉市街地を描いた鳥瞰図
(中西僚太郎)
- 第Ⅶ章 大正・昭和前期の職業別明細図
－「東京交通社」による全国市街図作

成プロジェクト(河野敬一)

第Ⅷ章 地誌と写真帖(三木理史)

第Ⅸ章 リーフレットからみる満州ツーリズム
(荒山正彦)

上記の構成にみるように、本書において近代日本の地域として取り上げられた事例は、植民都市「札幌」、植民地「満州」、近代地方都市「富山・金沢」・「前橋市」・「千葉市」、温泉地「熱海」、景勝地「松島」と多岐にわたり、いずれも近代という時代の特徴やその意味を再検討するための重要な要素を含んでいる。主たる史料に目を向けると、鳥瞰図(主に真景図)、民間都市図、職業別明細図、地誌と写真帖、リーフレットなど、当時における様々な視覚的メディアが用いられており、その詳細な分析を通して描かれた具体的な地域像は秀逸である。既往研究において比較的多く言及されている鳥瞰図を取り上げるだけでなく、学術的研究としては従来ほとんど着目されてこなかった民間地図や写真帖、リーフレットなどへの行き届いた目配りは、近代日本における地域を多面的に描き出すことを可能にするとともに、新たな研究の方向性を提示するものとなっている。

タイトルに見るように、本書が示した研究の新たな方向性は、当時におけるメディアの分析を試みることを通して近代日本の「視覚的経験」を追究しようとした点に求められる。近年、社会史的研究において歴史認識の主体研究で用いられる「まなざし」という概念が「開拓使の眼差し(9p)」、「市民大衆のまなざし(34p)」として登場し、さらに絵師である松井天山、民間地図作成主体である東京交通社や商工者などの作成意図や空間認識への言及を総括して「視覚的経験」と換言したことによって、本書の魅力は読者へ存分に伝えられている。さらに望むとすれば、絵地図を描かせる人、描く人、見る人、つまり、視覚的経験の主体は誰か、そしてその主体によって近代日本の地域像は

どのように描き分けられるのかを意図的に整理することによる議論の深化が期待される。

本書は2007年に刊行された『近代日本の地域形成 歴史地理学からのアプローチ』（海青社）に続いて、日本地理学会・近代日本の地域形成研究グループによる共同研究から生まれた成果である。1999年度に開始された近代日本の地域形成研究グループの共同研究は、1994年度に始まった近代日本の地理学談話会から発展したものであり、2001～2004年度に日本学術振興会科学研究費補助金（近代日本における国土空間・社会空間の編成過程に関する歴史地理学的研究、基盤研究（A）（1））、2003年～2006年度に（近代日本の民間地図と画像資料の地理学的活用に関する基礎的研究、基盤研究（B））などの交付を受けながら、着実にその成果を实らせてきた。作成された報告書および学会における合評会、シンポジウム開催などによって、当該研究グループから発せられる「近代とは何か」、「なぜ近代日本の地域形成なのか」、「近代日本を如何に描くか」という問いから多くの刺激を受け、新たな研究展望を見いだすきっかけを得たのは私だけではないはずである。

地域の地誌的情報を伝える手段として、測量に基づいて記号化、抽象化された近代地図の味気なさは対照的に、絵師の世界観や作成意図などの「任意表現（117p）」が許容された絵地図や古写真の世界からは当時における人々の視覚的経験の豊かさを読み解くことができる。本書が提示したこのような視点を地理学における意義として問うならば、近代という時代に着目した独自性とは別に、「抽象的・物理的空間としての空疎化されてしまった地域に、内実を取り戻し、主体にとっての意味のある「場所」として見つめ直そうとする人間主義的アプローチ（矢守1984）」にも広く通ずるところがあるように思われる。

（湯澤規子）

文 献

織田武雄（1943）：『地図の歴史』講談社。
矢守一彦（1984）：『古地図と風景』筑摩書房。

ダグラス・ボッティング著（西川 治・前田伸人訳）：『フンボルトー地球学の開祖ー』東洋書林。2008年10月刊、410p.+62p., 4,800円（税別）

本書は、1973年に刊行された Humboldt and the Cosmos の日本語訳である。刊行当時から、フンボルトに関心をもつ人々に注目され、愛読していた日本人も数多かった名著といえる。遅ればせながらではあるが、フンボルトを知る最良の手引き書が、没後150周年にあたる2009年を目前にして日本語訳されたことを喜ぶたい。

一般読者を想定したフンボルトの伝記としては、これまでにガスカール『探検博物学者フンボルト』（白水社、1989年）がある。これに本書が加わったことで、多彩な側面をもつ知の巨人フンボルトが、日本の読者にとっても包括的かつ容易にアプローチできる存在になった。2つの本を比べると、ボッティングのそれは原著出版年が古いものの（あるいは古いがゆえに）、多面的で詳細な伝記的事実を知らせてくれる。読者が最初にとるべきスタンダードな入門書といえる。このことは、原著の出版が広く世界的に歓迎され、すでにドイツ語訳（1974年）やフランス語訳（1988年）があること（訳者によればスペイン語訳もあるそうである〔評者未見〕）でも明らかであろう。

さらに本書は、詳細である反面、とかく無味乾燥になりがちな伝記の弊をまぬかれている。出生から幼年、青春、壮年、老年、死去と、90年の長きにわたる生涯を描きながら、単調におちいることなく生彩な記述に満ちている。これは、フンボ

ルトという多面的な素材に対して、ボッティングが施したメリハリの利いた選択によるものであろう。本書の中心は、1799年6月から1804年8月まで、5年2か月におよんだ南北アメリカ旅行で、なかでもベネズエラ内陸部（オリノコ川流域）の探検旅行（1800年2月から同年6月までの約4か月間）に焦点があてられている。ちなみに、ボッティング自身が探検家であり、フンボルトと同じルートを踏破している。

こうした選択は、本書の構成やページ配分をみれば明らかである。科学的な探検旅行をころろざして具体的な準備を始めるまでの期間（1章から4章まで）は、あわせても約50ページで全体の7分の1を占めるにすぎない。これに対して、先述の南北アメリカ旅行に関しては、その前後を含めると約180ページ（5章～14章）があてられ、全体の半ば近くを占めている。とくに、オリノコ川探検の記述（9章「リャノス」、10章「大瀑布を越えて」、11章「カシキアーレ水路の秘境地帯」）だけに50ページ以上がさかれており、本書の白眉といえる。また、ヨーロッパに戻ってからのフンボルトについても、旅行でえられた学術的成果の出版に関する記述（15章「パリの著名人」、16章「南アメリカ旅行に関するさまざまな著作」）が詳しい。後年のロシア旅行（19章「シベリア探検」）や代表的著作『コスモス』（20章「コスモス」）は、相対的にみれば簡略な記述ということになる。

ボッティングは、執筆にさいして、フンボルト自身の手になる旅行記録や書簡類を精査し、本文中にしばしば引用している。旅行記録は、アメリカ旅行の学術的成果『新大陸における熱帯諸地域への旅行（全30巻）』の一部をなすもので、その大半がベネズエラ滞在中の記録にあてられている。近年、その抄訳が『新大陸赤道地方紀行（全3巻）』（岩波書店、2001～2003年）として刊行された。その意味では、ベネズエラ旅行について、

フンボルト自身による報告を日本語で読めるわけである。しかし、だからといって本書の価値が失われたとはいえない。フンボルト自身の文章は、一般の読者にとってコンパクトではないからである。親友のアラゴ（フランスの物理学者・天文学者）は、フンボルトの文章について「君は本をどう書いたらよいか、まったくご存知ないようだ。何もかも際限なく書くが、それは本ではない。額縁のない絵のようなものだ」（本書 p.253）と評したそうである。したがって、入り口としては、いまでも本書が最良の手引きであろう。本書を読むことで、フンボルト自身の手になる旅行記録にチャレンジする意欲もわいてこよう。

蛇足ながら、評者もかつて『続地理学の古典－フンボルトの世界－』（古今書院、1997年）のなかで、フンボルトの南北アメリカ旅行について要約を試みたことがある。そのさい、5年2か月にわたった全行程を、滞在期間の長短に対応させて記述する方針をとったため、ベネズエラ旅行に関する記述があっさりしたものとなった。そこで、この「期間については、ガスカールの『探検博物学者フンボルト』を参照して」いただきたいと付記したが、実際に念頭にあったのはボッティングの本書であった。その日本語訳が、こうして現実のものとなり、たいへん喜ばしく感じている。

最後に、本書には訳者二人による充実した解説が付されていることを特記したい。「訳者まえがき」では、フンボルトをより深く知るための手がかりが紹介されており、巻末には「A. フンボルトと日本－幕末から昭和にかけて－」および「A. フンボルトとラテンアメリカ」という2編の論考がおさめられている。また、関連する年譜や人名・事項小事典などもあり、訳者たちの本書に対する思い入れの深さを感じさせる。ドイツ語訳やフランス語訳よりも格段に充実した出来ばえといえよう。

（手塚 章）

平岡昭利著：『地図で読み解く日本の地域変貌』
海青社。2008年11月刊，333p.，3,048円（税別）

地図が地理学の最も基本的なツールの一つであることは論を待たない。わけても国土基本図として作成された地形図は、国土の領域を網羅し、地形や植生をはじめ土地利用の形態を高い精度で示しており、地図は地理学者の共通言語とも称される所以である。一方で地図のデジタル化が急速に普及し、多種多様な地図が次々と生産される現代では、発信される地図情報も膨大なものとなっているだけでなく、その消費のスタイルも確実に変容しつつある。デジタル地図は、コンビニエンスストアやガソリンスタンドの位置、目的地までの最短経路といった位置情報の迅速な確認に威力を発揮し、時には空いている道路の情報まで提供してくれるが、それぞれのコンビニエンスストアやガソリンスタンドの立地要因を教えるはくれない。GIS技術の進歩は、膨大な地理情報を重ね合わせた地図の作成を容易にしたが、そこに描かれる地図は研究者の問題関心に即したデータが投影された地図であり、個々の要素間の関係は明らかにされても、地域全体の構造を示すものではない。

本書の目的は、「古い地形図と現在の地形図の『時の断面』を比較することにより、我々が住んでいる地域は、どのように変貌してきたのかを視覚的にとらえようとする」（はしがき）ことにある。本書の編纂の意義は、デジタル地図全盛の現代において、国土の詳細な地理情報を時間的にも空間的にも最も系統的・画一的・網羅的に表現された地図としての、国土基本図（5万分の1，2万5千分の1地形図）の読み取りを通して、地図に表象された地域の様態を示すことにある。本書では、地域の様態を地域構造と言い換えることが可能である。地域の全体を理解しようとする地理学にとっ

て、本書はまさに画期的な試みといえる。

小稿では、簡単に本書の内容を紹介するとともに、その意義と利用法について述べたい。本書では、北海道から九州から111か所の地域が選択され、編者を含めた86名の人文地理学者によって執筆されている。まず編者の企画力もさることながら、これほど多数の執筆者を選定し、オーガナイズしたことに讃辞を送りたい。もちろん本書に先立つ類書として、編者自身による『地図で読む百年』シリーズ（古今書院刊）に言及する必要がある。こちら新旧の地形図を比較し、地域によっては写真と図版を加えて、地域の変化を記述した労作であり、10冊で240を超える地域が取り上げられている。こちらは1997年から2006年まで10年をかけて出されたシリーズであるが、本書では執筆者の変更がなされた地域も多く、また対象地域の新設（例えば富良野や南大東島など）がなされ、新規の本として編纂されている。111の地域は都道府県庁所在地や主要都市のほか、特に変貌の著しい地域が選ばれている。八郎潟干拓地や鹿島臨海工業地域、砺波平野、千里丘陵、与勝諸島（沖縄県）などが該当する。

各地域の記述スタイルは執筆者や場所による個性もみられるが、共通のコンセプトが存在する。基本的には見開きの2ページで1都市・地域の構成をとり、明治期と現代の地形図を比較しながら、地域の変貌を地理学者の視点から記載している。東京と大阪には8ページが割かれ、大正・昭和期を加えた4葉の新旧地形図を用いて、地域の変貌が語られている。札幌・仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡といった都市では同じく6ページと、帯広・八郎潟・千葉・さいたま・姫路・岡山・長崎・熊本などでは4ページが充てられ、対象地域に充当された記述量と新旧地形図の図葉数によって、都市・地域の重要性が看取される。記述内容について東京を例にみてみよう。こ

ここでは「自然的基盤と江戸時代の名残」「明治の都市計画と関東大震災・復興計画」「戦後の復興とオリンピック開催」「バブル期以降の変容」の4つの小見出しのもと、東京の自然的基盤と歴史に基づく土地利用の特徴、明治期以降の都市計画に伴う、東京各地区の変化とそれを支えた交通網の発展、戦災復興とオリンピックによる都市改造、バブル期以降の現代の東京の変化、臨海副都心の開発と都心回帰の現象など、東京の地誌が歴史的経緯とともに記載されていることがわかる。

本書の執筆者は人文地理学者であるため、読図そのものに焦点をあてるのではなく、地形図を手掛かりにして、地域の土地利用と景観の変化を読み取ることに主眼が置かれている。一方で執筆者の多くは各都市・地域の専門家であり、豊富な地域情報を知っているがゆえに、地図を離れた情報が盛り込まれているものもみられる。もっとも読者にとって、それは地域の貴重な情報であり、本書は地図の読解を目的にするものではなく、すぐれた地誌書として読まれるべきであろう。本書で試みられた新旧地形図を比較しながら、地域の変貌を明らかにするというスタイルは、先述した編者自身によるシリーズ本に先立って、『日本図誌体系』（山口恵一郎編、朝倉書店）や『地形図に歴史を読む』（藤岡謙二郎編、大明堂）といった名著があり、同様に写真を用いたものとして、『写真で読む地域の変貌』（穂積修一、二宮書店）など、数多くの土地利用や景観の新旧比較から地域を読み取る試みが、地理学の分野において蓄積されて

きた。しかしながら本書の試みを、屋上屋を架すものして批判するならば正鵠を得ない。本書は、現代の視点から、日本の重要な都市・地域のダイナミックな変貌を1冊にまとめた貴重な試みであり、現代日本の地誌書として十分に評価されるべきであろう。地形図上に表われた土地利用の各要素は、別個に独立して存在するのでも任意に存在するのでもない。ある自然条件の下で営まれてきた長い人間の歴史の中で、土地利用は改変されてきたものであり、そこには空間の秩序と地域の構造が見出されるものである。

地形図はこうした人類の営為の歴史を克明に記載した人類の貴重な知的遺産である。ところが喫緊の問題として、国土地理院では、現行の地形図の植生表記などを簡略化し、5万分の1や1万分の1といった編集図の紙媒体での作成を中止する可能性が示唆されている。地形図は地理学者のものではないが、地形図の社会的意義を広範に知らしめるのは地理学者の責務である。本書の意義とともに我々に課せられた責務は大きい。

(松井圭介)

文 献

- 平岡昭利ほか編(1997～2006)：『地図で読む百年 全10冊』古今書院。
 藤岡謙二郎編(1969～73)：『地形図に歴史を読む 第1集～第5集』大明堂。
 穂積修一(2001, 2003)：『写真で読む地域の変貌 東日本編, 西日本編』二宮書店。
 山口恵一郎編(1972～80)：『日本図誌体系 全12冊』朝倉書店。